

京鹿子

昭和五年六月一日発行
巻二一八六号(毎月一回一頁発行)



6月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その九十三



蝌蚪の池ごん太の後に泣き虫も
遁世も楽天もよしはぐれ蝌蚪
囀りの恋の矢数の乱反射
囀りやみくじの枝へ一羽二羽
小満の風の端くれ解いてやる
笑み涼し見返り弥陀と見合はせり
流れ矢の地球^ほを蝕む半夏雨

花虻の括れを武甜の一花攻め
就中一味の雨の半夏寺

吟行・膳所界限

城門に歩兵の翳や蟻の列
木曾塚へ蝶一頭の翅休め
葉桜の日矢を返して天守跡
草庵を解き初蝶時戻す

俳句四季六月号「麦酒」

口唇の麦酒ひとあわ紅解く

近詠

名誉顧問

和田 照海



齋島 いじき

齋島 絹 霽 霽 する 山 桜
 磯 遊 び 母 の 唾 で 治 る 傷
 投 げ 渡 す 郵 袋 ひ と つ 夏 来 る
 花 蜜 柑 件 の 研 師 沙 汰 の な き
 干 鰈 乾 く 途 中 の 舟 溜 り

近詠

名誉顧問

塩貝 朱千



わたしは私

蝶 の 昼 あ づ ま 遊 び の ペ ン と 紙
 変 は る 世 に わ た し は 私 初 桜
 薔 薇 の 芽 や 舞 妓 の 眦 ほ どの 紅
 俳 や 連 翹 の 黄 に 溺 れ る て
 蒼 天 の 深 み へ 放 つ 春 愁

神麓集

近詠

福主宰

村田あを衣



空想

春近し約束の日のドアノック
薄氷のひと揺れ目覚む自立心
解けば蝶母のしつけの花衣
夏は来ぬ踏めばすぐ開く自動ドア
空想の羽は大きく更衣

梅雨 沼田巴字

夜の蝉 北川孝子

十巻の古典手にせり梅雨に入る
梅雨寒し老いに重ねる掛布団
梅雨寒や襖のへりを走る虫
紫陽花のふはりと浮いて気球めく
父の日やよき子よき妻すこやかに

室町の五線紙嘶す夜の蝉
逡巡のきはみ一気に蝉の鳴く
自由とは何か言ひたき夜の蝉
夜の短かなれど言ひたき膝かしら
ゆるみなき夜の逡巡蝉の鳴く

青き踏む 植村蘇星

ぶらんこ 直江裕子

それなりの高みへ一步青き踏む
入学子一夜明ければ俺々と
校門を出れば母校と卒業子
春日射す天守煌々燦然と
深しんとせせらぎの青春の月

ぶらんこにきらきらネーム揺れてゐる
侘助の落ちて日暮れの色となる
括られて足たたまれて蟹届く
もう芽吹くことなき枯れ木だつたのか
春の雪メモの文字さへ捨てられず

辛夷咲く 高木晶子

門限は午前〇時の雛まつり
臆したり岸に留まる流し雛
雛供養積まれつまれて無表情
菜の花を育て戦は今もある
辛夷咲く時衰へぬ日和かな

村八分 奥田筆子

迷ひ蝶神話のはじめ見てしまふ
榊の森大なた振へば若芽凛
燕来る悲しい箱の隠し方
竹林や猪の抉りし土匂ふ
久方の春の電話に村八分

さくらの色 伊藤希眸

春の雪戦なき国にシヨパン聴く
芽吹き初むあの北山に炎の匂ひ
春の雲彫つてみたきは父母の顔
新蕎麦を共にすすりし夫は亡く
暫くはさくらの色に身を染める

紫陽花 井上菜摘子

まんなかにおてあぢさゐのシンフォニー
紫陽花にあづけしこころ凧いできし
あぢさゐや晩年うすく色重ぬ
紫陽花園に三叉路誰か泣いてゐる
あぢさゐの静寂はるかを戦ある

神麓集

パンドラの箱 山中志津子

海苔搔き女流人の血筋受けつぎて
春を待つコノハナサクヤ姫を待つ
雪解風髪の一とすぢひとすぢに
花粉症かも右脳の怠け癖
春障子開けパンドラの箱開ける

あさきゆめ 鷺山珀眉

かげろふの持ち上げてゐる東山
先頭を行く雄叫びや春一番
春宵のあさきゆめみる酔ひ心地
文管へ春燈ひとつ残しおく
字余りの小さな気負ひ亀鳴かす

新樹光 井尻妙子

蝌蚪の陣乱すは理系なる男女
新樹光嬰の匂ひのする職場
言はないと決めた約束夜の新樹
新樹光傷心に添ふ風やさし
ミステリーツアー囀りの真ん中

二月尽 亀井福恵

振り向けば骨の鳴る音二月尽
淡き雲たゆたふ春のさきぶれに
地虫出づ気負ひを生きる力とし
うつしみや円相に引く寒の紅
春どなり起承転結課してをり

鳥遊ぐ 西村 白杼

花鳥のころろ 安田 優歌

四温晴無限の空を鳥遊ぐ
沈丁花君の本音が見えて来る
白梅や白で通すも難き世に
卒業す以下同文で羽搏きぬ
天も地も水色にじむ犬ふぐり

人を愛し花鳥のころろ水仙忌
月ヶ瀬の一山一枝梅匂ふ
水をあぶ鳥春光をまき散らす
俳句てふ魔ものに憑きて風うらら
両胸に掌を置く野風呂の忌

初蝶 菊池 和子

朧夜 本郷 公子

初蝶のための蒼天雲置かず
足裏より胸奥に聴く春のこゑ
笹鳴きや宮へとつづく社家の径
雪割草風むらさきの山の詩
鳥影はきつとあの鳥春障子

古雛文筥に母の文の束
朧夜の長崎古地図異国めく
猫の恋星も覗かぬ猫の闇
千体佛の翳の交錯遅日光
旅はるかなり北国の春遠し

神麓集

神麓集

日永の帆 石原 孝人

遅桜 山田 和

順番を待つ子目で漕ぐ半仙戯
離るとも寄るとも見ゆる日永の帆
「よろしく」で届く伝言山笑ふ
バス待てば時間の積もる春の雪
竹林の風の影絵や春障子

遅桜房で散りけり女人堂
丈六の肩へ休むる毛虫かな
お尻から降りる子馬や風光る
木簡の子を思ふ歌鳥帰る
身を清む瀬見の小川の紅椿

草餅 佐藤 千恵

春の夜やころがつてゐるコルク栓
春霞の打つにまかせる干物籠
草餅や夫の家系の揺れてゐる
あたたかや己が名を呼ぶ籠の鳥
ぬばたまの黒き娘の髪雛の髪



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

水琴集

暁の渚に戻すさくら貝

岡山 岸本 順子

静けさに張りさけさうな桜の夜

割り切れぬ明日へ桜の咲き初むる

母を恋ふ河津櫻の堤まで

牡丹の芽やはき葉先に日を集む

春障子築百年の陽をつむぐ

福知山 松山 潤子

卒業の目力にある可能性

時に触る詩は無限に水仙忌

長き世を語る家紋や朽ち土蔵

梅が香に寄せては返す恋歌かな

横浜 兵 泉美

漣や一日平らな鬼やらひ

月の舟枯木の間を光りつつ

図書室は八畳和室黄水仙

春霞扉を開くパスワード

海の青と花菜の黄色国旗揚げ

奈良 瀬尾千鶴枝

動に隙静に隙なし地虫出づ

梅日和「徹子の部屋」の生き字引

青春の醒めなき夢を春の星

まんまるとまるまるひかる梅つぼみ

冴返る右脳左脳のせめぎあひ

啓蟄や駅に喪の客婚の客

リアカーの宅配便や梅小路

石蹴りの出来ぬ齢となりて春

月おぼろ十尺先の検眼表

風光る果敢にいどむ逆上り

船橋 元橋 孝子

福山 大塚 文枝

飛騨椅子の猫の館長春の夢

美濃紙にねむる物種「君の名は」

花信風空へ漕ぎ出す半仙戯

葉牡丹の茎立ちよりの自由かな

アパートの屋根三日目の猫の恋

恋猫の目の睨みをり誘ひをり

チューリップさくら組より自己紹介

鼓動より早き水音雪解川

春光をシャベルの掬ふ砂あそび

泣いてゐる地球に祈りを春の月

啓蟄の糸を垂らすや釈迦の沙汰

カーナビに逆らつてみる道のどか

もふもふの気嫌よき土菊根分け

むずむずと大地の緩み雨水の日

沈丁花ひと粉づつの香を放つ

京都 林田 紀子

妹としばしの別れ春寒し

春うららH A I K U W A L K 二十人

春の宵晴天率の友の婚

春めきて娘のメールきびきびと

大正のさくら令和へ芽組みたる

アヲチ 伊吹 之博

英華採集

啓蟄の糸を垂らすや釈迦の沙汰

京都 林田紀子

芥川龍之介の小説に「蜘蛛の糸」があるが、これは釈迦が地獄の罪人を一回の善行により地獄より助け出すために一本の蜘蛛の糸を垂らした話で、結局は自らの邪な心が災いして元の地獄に戻る羽目になった罪人の悲しい性を描いている。掲句は、啓蟄の頃になると土の中に今か今かと待ち望んでいる万物のために啓蟄の糸を釈迦が垂らしている。その糸を頼りに這い出す物へ釈迦がどういう沙汰をするのかを読み手に答えを委ねている。

動に隙静に隙なし地虫出づ

船橋 元橋孝之

私は歴史小説が好きでよく読んでいるが、テレビの時代劇もよく観ている。掲句の上五中七は剣術の心得ではないだろうか？剣道家の話によれば相手の動きにより仕掛け技、出ばな技、応じ技、が出せるらしい。即ち、静から動は相手の動きの隙に応じる瞬時の技ということになる。さて、啓蟄の頃になると多くの地虫達が穴から出てきて活動を始めるが、土の中では息を潜めていたものが動き出すことで所謂無防備な隙を見せる。虫達への警鐘の一句。

啓蟄や駅に喪の客婚の客

福山 大塚文枝

偶然にして啓蟄の句となった。高倉健主演の映画「鉄道員」は、原作が浅田次郎で鄙びた小さな駅を守り抜いた男の生き様が描かれているが、今では、殆どの駅がマンモス化して、様々な人が集まりそして其々の目的地へと吐き出していると云った方が合っているのではないか。掲句は、正に駅に集まる人達の中の人生に関連する「結婚」「葬式」を例に取ったもので、虫達が世に出てやがて恋をして子を残り一生を終える「啓蟄」との取合せは妙に響き合う。